

仙台藩茶道石州流清水派の祖三世 清水道竿の業績（その三） 道竿著『道竿拾躰』の解説研究



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世

大 泉 道 鑑

仙台藩茶道石州流清水派（当流）三世清水道竿（さおど
うかん・寛文二年〜元文二年——一六六二〜一七三七）の業
績については、まず筆者の母で当流宗家十世大泉道鑑（明
治四二年〜平成二二年——一九〇九〜二〇一〇）により、「そ
の一」として「道竿の経歴と人脈」が『関』第二十号に投
稿された。これを受けて、筆者は「その二」として「道竿
の作庭と伝わる庭園」を『関』第二十七号に投稿し、それ
が昨年掲載された。最近、筆者は当流だけではなく茶道界
全体にとっても重要な文献である三世道竿著『道竿拾躰』
（写真1及び2）の解説研究を行い、その成果を茶の湯文
化学会の学術誌『茶の湯文化学』（二十八号、写真3及び



写真1 三世清水道竿著『道竿拾躰』の表紙（右）と一丁表（左）
（東北大学中央図書館蔵）

4）で、十世道鑑と共著で発表した。そこで、今回この研
究成果の概要とこの文献の歴史的意義を「その三」とし
て、説明させて戴いた。三世道竿の人物像については、十

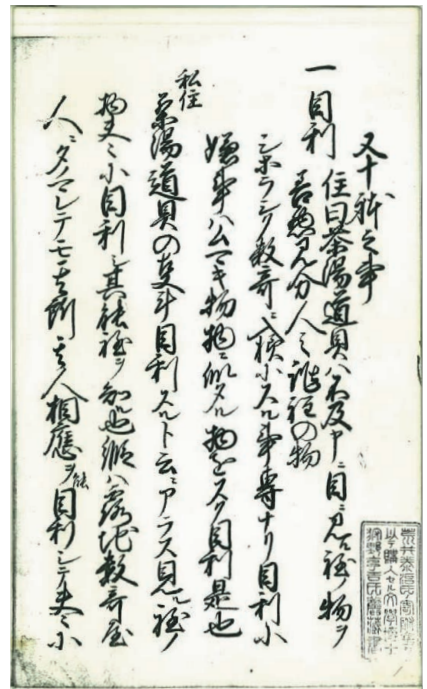


写真2 『道竿拾鉢』の第一頁

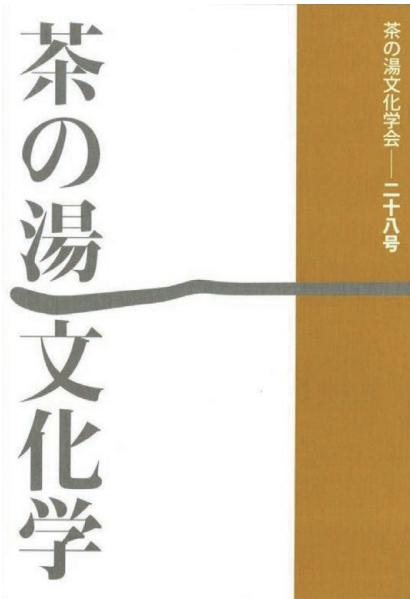


写真3 『茶の湯文化学』(28号)の表紙

世大泉道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』及び『関』(第二十号及び二十七号)に、すでに説明されているので、ここではごく簡潔に述べる。石州流の流祖片桐石州(慶長一〇年〜延宝元年—一六〇五〜一六七三)の

『道竿拾鉢』

解説 (故)十世 大泉道鑑
十一世 大泉道鑑
校閲 細井 計

【解題】

仙台藩の茶道の歴史は古く、藩祖伊達政宗が古田織部正重然(山城国西岡の大名、織部流の祖)の高弟で、当時茶人として京都で活躍していた一世清水道閑(天正七年〜慶安元年—一五七九〜一六四八)を、初代の仙台藩茶道頭に招聘したことに端を発している。その跡を継承したのが、二世清水動閑(慶長一九年〜元禄四年—一六一四〜一六九二)であり、二代藩主伊達忠宗の命により、茶道石州流の祖片桐石見守貞昌(石州)(大和国小泉の大名)の許で十三年間修業を続けた後、帰藩して茶道頭に任ぜられた。二世動閑は、『清水動閑註解石州流三百箇條』(三巻)及び『動閑茶湯書』(十八冊)を著わし、仙台藩の

高弟である当流二世清水動閑(慶長一九年〜元禄四年—一六一四〜一六九二)の没後、その後継者には仙台藩四代藩主伊達綱村公(写真5 万治二年〜享保四年—一六五九〜一七一九)は二世動閑の実子(快閑)ではなく、一門の

写真4 『茶の湯文化学』(28号)「道竿拾鉢」の一頁の解題の一部



写真 5 仙台藩四代藩主伊達綱村公像(仙台市博物館蔵)

茶人の中で実力が以前から目に留まっていた馬場道斎(後の三世道竿)を大抜擢した(図)。綱村公自身も「数奇大名」として全国的に有名で、自らの著書である『数奇秘密相伝』、『茶説』や『茶人説』からだけではなく、『肯山公治家記録』、『伊達綱村茶会記』、『清水動閑註解石州流三百箇

條付仙台藩茶道』等の歴史書・文献を通覧しても綱村公は、終生茶湯を心から愛し、その奥義を極めていたと考えられる。このことが、三世道竿の茶湯における才能がいかに優れていたかを見抜くことが出来た所以であろう。その後、三世道竿はその大きな期待に見事に応えたため、綱村公に続き五代藩主伊達吉村公(延宝八年〜宝暦元年―一六八〇〜一七五二)の茶道指南役と言う大役も果たした。更に、当流の芸術性を一層高めて新たな流派を築くとともに、藩内だけではなく、全国各藩にも当流を広めた。三世道竿は、これらの業績から藩内外の高い評価を勝ち取って、当流の流祖と称されているが、仙台藩茶道茶道頭清水家を継ぐ者として自らは、その三世と称していた(『原色茶道大辞典』、

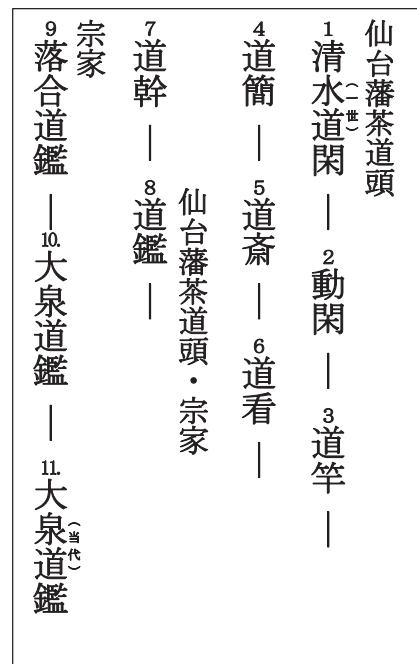


図 仙台藩茶道系図(茶道頭・宗家)

『道竿拾鉢』投稿要旨

解説 仙台藩茶道石州流清水派宗家

(故) 十世 大泉道鑑、十一世 大泉道鑑

校閲 岩手大学名誉教授 細井 計

千利休の高弟山上宗二の茶道伝書『山上宗二記』には「茶湯者覚悟拾鉢」及びその追加「茶湯者又拾鉢」がともに記載されている。それによると、茶湯者とは茶の宗匠のことで、目利きであること、茶湯に優れていること、師匠をしていることをいうが、これらの条件のほかに「茶湯者覚悟拾鉢」及び「茶湯者又拾鉢」が必要であるとしている(桑田忠親著『茶道辞典』)。「道竿拾鉢」は、仙台藩茶道茶道頭三世清水道竿がこの「茶湯者又拾鉢」の写しにさらに「私註」として道竿の考えを大幅に書き加えたものである。「道竿拾鉢」に記載されている十ヶ条は次の通りである(『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』)。

又十鉢之事 一、目利 が専 一、手前ハ薄茶力專也 が 一、囲爐裏風炉の炭之事 一、所作花生様 すえ 一、風爐小板金直二居 ん 様同 囲炉裏之内金の釣様其外手 二 而仕程之 會 所作之事 一、會席之事 一、客人振りの事 一、教寄雑談之事 一、茶湯 はつと ハ習骨法普法度第一教寄仕様ト云事有 一、茶湯の師匠 二 別而後迄 二 用 ん 覚悟 のうまえ 一切之上 佛法歌道并二能 舞刀噺又下々の所作迄モ名人の仕事ヲ茶湯ト目利 条 ト二ヶ條の手本 二 取也

『茶道辞典』。

さて、江戸時代から些かも変ること無く脈々と受け継がれてきた当流の原点として、極めて貴重な茶湯書である三

世道竿著『道竿拾鉢』が、東北大学中央図書館の狩野文庫

(付記1)に保存されていた。この三世道竿の著書は、茶聖・

千利休(大永二年〜天正一九年―一五二二〜一五九一)

の高弟山上宗二(天文一三年〜天正一八年―一五四四〜

一五九〇)の茶湯伝書『山上宗二記』の「茶湯者又拾鉢」

の箇所^{やまのうへのそつじ}の写しに、三世道竿の考えを「私註」(付記2)と

して詳細に書き加えて、「茶人の心構え」を説いたものである。

最近、著者らはこの『道竿拾鉢』の解読研究を行う

とともに、読者の理解の便を考慮して傍注を付け、それら

の注釈を文末にまとめて記して、前に述べた学術誌に発表

した。今回は、紙面の都合のためそれを投稿する際に、本

文と併せて投稿したその要旨のみを上^二に示したが、この本

文の詳細については、この学会誌を参照して戴きたい。

ここで、先に触れた『山上宗二記』の歴史的意義につ

いて少し触れておきたい。この筆者の宗二は、永禄三年

(二五六〇)に一七歳から利休のもとで茶を学び、若くし

て一角の茶人として認められていた。それ以降、豊臣秀吉

(天文六年〜慶長三年―一五三七〜一五九八)に惨殺され

るまでの宗二の茶道における活動を表にまとめた。この表

からも明らかな様に、二〇年余りの長きにわたり利休のも

表. 山上宗二の茶道の活動

永禄 3 年 (1560)	17 歳から利休に茶を学び始め、その後 20 年余にわたり利休の側に仕えた。
永禄 8 年 (1565)	22 歳で初めての茶会(正客：利休)を行なった。
天正 2 年 (1574)	織田信長の相国寺茶会に参加(『信長茶会記』)。
天正 10 年 (1582)	本能寺の変(信長没)後、千利休や今井宗久の引き立てにより、豊臣秀吉に仕える。 秀吉の茶頭：千利休、今井宗久、津田宗及、山上宗二、重宗甫、住吉屋宗無、 万代屋宗安、千紹安(道安)(『山上宗二記』)
天正 11 年 (1583)	秀吉の怒りをかって牢入・追放。
天正 12 年 (1584)	秀吉の怒りが解け、堺に戻る。
天正 14 年 (1586)	豊臣秀長(大和郡山)のもとで茶会を開く。高野山に逃れた。 千利休から受けていた伝授に、自分の見解を加えた茶の湯伝書 『山上宗二記』を著わす(～天正 15 年)。
天正 16 年 (1588)	小田原北条氏の茶堂として活動した(～天正 17 年)。
天正 18 年 (1590)	小田原攻めに召し出されたが、その後秀吉により惨殺される。

とで茶道を学び、その極意を伝授された宗二は、利休が「わび茶」を大成していく様子をつぶさに観察し、熟知出来る立場に居た。そのため、『山上宗二記』には、天正年間で完成を見た「わび茶」の成立期の子細が正確に記されていると考えられる。従って、この宗二の茶道伝書は「わび茶」の成立期を解明しようとしている研究者からは、信頼性の高い貴重な歴史的文献として、高く評価されている。

ところで、当流では、仙台藩茶道の歴代の茶道頭・宗家を継承する際には、その都度その印(「三種の神器」として『清水動閑註解石州流三百箇條』及び『動閑茶湯書』『渋紙庵之記』に加え、『片桐石見守貞昌宗閑居士像』の三つの文献(資料)が手渡されてきた。特に当流の流儀は二世動閑のこの著書(写真6)を基礎にして発展してきたので、当流にとつては最も重要な文献と言えよう。一方、当流は三世道竿により、創意工夫されて完成を見たもので、三世道竿の「茶人の心構え」が明記されている『道竿拾鉢』は、前に述べた二世動閑の著書と並び当流の重要な文献の双璧と言うべきものである。

今回取り上げた『道竿拾鉢』と『山上宗二記』の内容を詳細に比較検討することにより、三世道竿が当流を確立し



写真 6 二世清水動閑著『清水動閑註解石州流三百箇條』三巻及び『道閑茶湯書』十八冊
(十一世大泉道鑑蔵)

ていく過程に「わび茶」を大成した利休及びそれを知る立場に居た宗二の考えがどの様に影響を与えたかを解明するための大きな手掛かりが得られると、筆者は期待して止まない。

付 記

1. 狩野文庫―東北帝国大学（現東北大学）に文科系学部が設置される際に、元旧制第一高等学校長、京都帝国大学文科大学長の狩野亨吉（慶応元年―昭和一七年―一八六五―一九四二）が、明治四五年（一九一二）からその死後まで、数度にわたって購入または寄付した十萬点以上にのぼる膨大な和書群を言う。

2. 私註―私注。自らほどこした註釈を謙遜して言う語。

謝 辞

『道竿拾穂』の解説研究を『茶の湯文化学』に投稿する際に、御校閲下さった細井計岩手大学名誉教授に、厚くお礼申し上げます。また、伊達綱村公像の掲載を許可下さいました仙台市博物館に深謝致します。

参考文献

『片桐石見守宗関居士像』 老中松平康福（妙関子） 自画賛

十一世大泉道鑑蔵

『関』（二十号）全日本石州流茶道協会 平成二十二年

『関』（二十七号）全日本石州流茶道協会 平成二十九年

『肯山公治家記録』 仙台市博物館蔵

『茶道辞典』 桑田忠親 東京堂 昭和四十三年

『原色茶道大辞典』 井口海仙 末宗広 永島福太郎（監修）

淡交社 昭和五〇年

『清水動閑註解石川流三百箇條』 清水動閑

十一世 大泉道鑑蔵

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』

十世 大泉淑子（道鑑） 丸善出版センター

昭和五十五年

『数寄秘密相伝』 伊達綱村 仙台市博物館蔵

『伊達綱村茶会記』 酒井巖 中央公論事業出版

昭和四十三年

『茶人説』『茶説』（如幻三昧集雜著）伊達綱村

仙台市博物館蔵

『茶の湯文化学』（二十八号）「道竿拾躰」 十世大泉道鑑

十一世大泉道鑑 平成二九年

『動閑茶湯書』 清水動閑 十一世大泉道鑑蔵

『山上宗二記研究』 茶の湯懇話会 財団法人三徳庵

平成六年

『山上宗二記付茶話指月集』 熊倉功夫 岩波文庫

平成十八年

『山上宗二記入門 茶の湯秘伝書と茶人・宗二』 神津朝夫

角川学芸出版 平成十九年

『よくわかる茶道の歴史』 谷端昭夫 淡交社

平成十九年